

負担と恩恵のバランス

名寄市立名寄東中学校 三年 中山 情

税の歴史は飛鳥時代の租庸調にまでさかのぼり当時から人々が収穫物や労役を分担して国を支えてきた。税は古代から人々の暮らしと国を支える大切な仕組みであります。私たちに深く関わっている。

現在では、所得税・消費税・固定資産税など様々な税があり、稼いだ分に応じて多く納める累進課税も導入されている。税金は具体的にどのように使われているのかといふと、身近な例でいえば学校で使っている教科書やタブレットに、道路や橋、学校や病院、災害復旧など多くの公共サービスなどにも使われている。しかしその一方で稼げば稼ぐほど大きく引かれる感覚や自分たちの生活に直接見えない使われ方をしている部分も多く、搾取されすぎているのではないかと感じることもあるかもしれません。私は税の仕組みを全否定するつもりはない。国を動かすためにはお金が必要でみんなで負担することは当然のことかもしれない。しかし現状の税制は「負担の重さ」と「使い道の分かりやすさ」のバランスが崩れているように思える。高所得者への税率が極端に高くなりすぎると働く意欲や国内での投資が減り結果として経済全体の活力も失われる可能性がある。また消費税のように誰もが同じ割合を負担する税を高くすると低所得者への負担が大きくなり生活を圧迫する原因にもなりかねない。

だからこそこれらの課題を解決することができれば現状を変えより納得して税を負担できる社会につながるはずだ。現状を変えるためには具体的な工夫が必要であり、そこで私はその解決策として二つの方法を考えた。一つ目は負担のかけ方を工夫することである。生活に必要な物は税率を低くし贅沢品や環境負荷の重い商品には税率を高くするなど負担に差をつければ生活を守りつつ社会のためにもなる。二つ目は税の使い道の可視化である。税金が何にどれだけ使われどんな成果が出ているのかを分かりやすく公開すれば税を納得して負担しやすくなる。

私たちはこれから社会を担う一人として税をただ払う存在ではなく使い道を理解し声を届ける存在になつていきたい。